

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

資料5

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	詳細の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う 使用環境の 変化			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
解熱鎮痛成分	アスピリン アスピリン末 岩城、バイ アスピリン	中枢性の解 熱鎮痛作用、 抗リウマチ作 用		クマリン系抗凝血症(出血傾 向の可能性)、血小板凝集 抑制作用薬・血栓溶解薬(出 血傾向の可能性)、糖尿病 用薬(低血糖の可能性)、メ トレキサート(汎血球減少の 可能性)、バルプロ酸ナトリ ウム(振せんの可能性)、フェ ニトイン(総フェニトイン濃度 は低下しても非結合型フェ ニトイン濃度は低下しない)、 アセトアミノド(嗜眠、錯乱等、 代謝性アシドーシスの可能 性)、副腎皮質ホルモン(サリ チル酸中毒の可能性)、リチ ウム(リチウム中毒の可能 性)、チアジド系利尿薬(チア ジド系利尿薬の効果減弱)、 β遮断薬(β遮断薬の作用 減弱)、ニトログリセリン(ニ トログリセリンの作用の減 弱)、尿排泄促進薬(尿排泄 促進薬の作用減弱)、乳酸ナ トリウム(本剤の作用減弱)、 非ステロイド性解熱鎮痛消 炎薬(出血及び腎機能低下)、 他の消炎鎮痛薬	頻度不明(喘 息発作の誘 発、肝障害、 黄疸、出血)	頻度不明 (ショック、ア ナフィキサ ン様症状、 SjJ症候群、 再生不良性 貧血)	頻度不明(耳 鳴、難聴、め まい、頭痛、 興奮、食欲不 振、胸やけ、 胃痛、悪心、 嘔吐、消化管 出血、肝障 害、腎障害、 過呼吸、代謝 性アシドーシ ス、低血 糖)、過度の 体温下降、虚 脱、四肢冷却	頻度不明(過 敏症、血液障 害)		本剤又はサリチル 酸系製剤過敏症 既往歴、消化性潰 瘍、重篤な血液障 害、重篤な肝障 害、重篤な腎障 害、重篤な心障 害、アスピリン喘 息又は既往歴、出 血傾向、出産予定 日12週以内、15歳 未満の水痘又はイン フルエンザの患 者	適応禁忌の既往歴 または重篤でない 場合、アルコール 常飲者、術後1週間 以内、妊婦又は妊 婦の可能性、過敏 症既往歴、気管支 喘息、高齢者、小 児、手術前、授乳 婦、消耗性疾患、 感染症合併者	感染症の不 顕性化	原因療法で なく対症療法	1日4.5gまで	過量により、重 度の過呼吸、呼吸 性アルカローシ ス、代謝性アルカ ローシス、痙攣、 不全等	急性疾患に 用いる場合: 長期服用原 則回避、慢性 疾患に長期 投与する場 合は定期的 な臨床検査 (尿、血液、 肝機能など)、 不妊?	適応(1):通常、成人には アスピリンとして、1回0.5 ~1.5g、1日1.0~4.5gを経 口投与する。なお、年齢、 疾患、症状により適宜増 減する。ただし、上記の最 高量までとする。適応 (2):通常、成人にはアス ピリンとして、1回0.5~1.5 gを頓用する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 ただし、原則として1日2回 までとし、1日最大4.5gを 限度とする。また、空腹時 の投与は避けさせることが 望ましい。高齢者は少量 から	(1)慢性関節 リウマチ、リウ マチ熱、変形 性関節症、強 直性脊椎炎、 関節周囲炎、 結合織炎、術 後疼痛、歯痛、 炎症性神経 痛、閉鎖性腫 瘍性筋痛、腫 瘍痛、筋肉痛、 捻挫痛、打撲 痛、痛風による 痛み、頭痛、月 経痛、(2)下記 疾患の解熱・ 鎮痛:急性上 気道炎(急性 気管支炎を伴 う急性上気道 炎を含む)	
	アセトアミ ノフェン	視床下部の 体温中枢に 作用し、熱放 散を増大させ 解熱作用を 示す。また、 体温中枢に 関与している プロスタグラン ジン合成阻 害はアスピリ ンと同程度と されている が、末梢にお けるプロスタ グランジンの 阻害はアスピ リンに比べて 極めて弱い		リチウム製剤(類薬でリチウ ム中毒の発現の可能性)、チ アジド系利尿薬(類薬利尿作 用の減弱の可能性)、アル コール(アルコール多飲常用 者肝不全)、他の消炎鎮痛 薬	頻度不明(喘 息発作の誘 発、肝障害、 黄疸)	頻度不明 (ショック、ア ナフィキサ ン様症状、 SjJ症候群、 Lylell症候群)	0.1~5%(悪 心、嘔吐、食 欲不振)、過 度の体温下 降、虚脱、四 肢冷却	頻度不明(チ アノーゼ、過 敏症)、0.1% 未満(血液障 害)		消化性潰瘍、重 篤な血液障害、重 篤な肝障害、重 篤な心障害、 腎障害、本剤過 敏症既往歴、ア スピリン喘息 又は既往歴	適応禁忌の既往歴 または重篤でない 場合、出血傾向、 過敏症既往歴、 気管支喘息、小 児、高齢者、妊 婦又は妊婦の 可能性、消 耗性疾患、感 染症合併者	感染症の不 顕性化	原因療法で なく対症療法	急性疾患の 場合:1日最 大1.5gまで	過量により肝、 腎、心筋の壊 死	急性上気道 炎:長期服用 原則回避、 フェナセチン の長期・大量 による間質性 腎炎、血色素 異常の発現、 腫瘍発生の 可能性、不 妊?	効能・効果(1)通常、成人 にはアセトアミノフェンと して1回0.3~0.5g、1日0.9 ~1.5g(錠200:4.5~7.5 錠、錠300:3~5錠)を 経口投与する。なお、年 齢、症状により適宜増減す る。効能・効果(2)の場合 通常、成人にはアセトアミ ノフェンとして、1回0.3~ 0.5gを頓用する。なお、年 齢、症状により適宜増減す る。ただし、原則として1日 2回までとし、1日最大1.5g (錠200:7.5錠、錠300: 5錠)を限度とする。また、 空腹時の投与は避けさせ ることが望ましい。高齢者 では少量から	1)頭痛、耳痛、 炎症性神経 痛、腰痛症、筋 肉痛、打撲痛、 捻挫痛、月経 痛、分娩後痛、 がんによる疼 痛、歯痛、歯科 治療後の疼痛 2. 下記疾患の 解熱・鎮痛:急 性上気道炎 (急性気管支 炎を伴う急性 上気道炎を含 む)	
	イソプロピ ルアンチピ リン	アンチピリン、 アミノピリン と同様な解熱 鎮痛作用。中 枢性の作用。		0.1%未満 (黄疸)	0.1%未満 (ショック、Sj J症候群、Lylell 症候群、再生 不良性貧血、 無顆粒細胞 症)	0.1%未満 (肝機能検査 値異常、腎障 害)、0.1~ 5%未満(胃 痛、食欲不 振、悪心、嘔 吐、下痢、頭 痛)	0.1~5%未 満(過敏症)、 0.1%未満 (貧血、血小 板減少)		本剤又はピラゾ ン系過敏症既往歴	本人又は家族のア レルギー体質、肝 障害、腎障害、血 液障害、高齢者、 妊婦又は妊婦の 可能性			鎮痛薬で上 限設定なし		長期服用原 則回避、不 妊?		解熱鎮痛薬の調剤。高齢 者では減量	解熱鎮痛薬の 調剤	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ			
解熱鎮痛成分	イブプロフェン	ブレンフェン	アスピリンの10倍以上の抗炎症作用、鎮痛作用、解熱作用	ジドブジン(血友患者で出血傾向の増強)	クマリン系抗凝血薬(出血傾向の可能性)、アスピリン製剤(アスピリンの血小板凝集抑制作用を減弱)、リチウム(リチウム中毒の可能性)、チアジド系利尿薬(チアジド系利尿薬の効果減弱)、タロリムス(急性腎不全)、ニューキノロン系抗菌薬(薬で痙攣)、メトレキサート(メトレキサートの作用増強)、コレスチラミン(本剤血中濃度の低下)、他の消炎鎮痛薬	頻度不明(消化性潰瘍、胃腸出血、潰瘍性大腸炎、急性腎不全、ネフローゼ症候群、肝機能障害、黄疸)	頻度不明(ショック、再生不良性貧血、溶血性貧血、無顆粒球症、血小板減少、SJ症候群、Lyell症候群、無菌性髄膜炎(特にSLEMCTDの患者))	0.1~5%未満(食欲不振、嘔気、嘔吐、胃部不快感、腹痛、消化不良、下痢、頭痛、眼瞼腫、0.1%未満(口渇、口内炎、腹部膨満感、便秘、肝機能検査値異常、霧視等の視覚異常、血圧上昇、動悸、倦怠感、発熱)、頻度不明(紫斑、喘息発作の誘発、難聴、耳鳴、味覚異常、抑うつ、血圧低下、鼻出血、血小板機能低下、黄疸)、過度の体温下降、虚脱、四肢冷却)		消化性潰瘍、重篤な血液障害、重篤な肝障害、重篤な腎障害、重篤な心障害、重篤な高血圧、本剤過敏症既往歴、アスピリン喘息又は既往歴、ジドブジン投与中、15歳未満の水痘又はインフルエンザの患者	適応禁忌の既往歴または重篤でない場合、出血傾向、過敏症既往歴、気管支喘息、SLE、MCTD、潰瘍性大腸炎、高齢者、小児、授乳婦、妊婦又は妊娠の可能性、消耗性疾患、感染症合併者	感染症の顕性化	原因療法でなく対症療法	1日600mgまで	急性疾患に長期服用原則回避、慢性疾患に長期投与する場合は定期的な臨床検査(尿、血液、肝機能など)、不妊?	適応1:1日量600mgを3回に分けて経口投与する。小児は、5~7歳 1日量200~300mg、8~10歳 1日量300~400mg、11~15歳 1日量400~600mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。また、空腹時の投与は避けさせることが望ましい。適応2:1日量600mgを3回に分けて経口投与する。小児は、5~7歳 1日量200~300mg、8~10歳 1日量300~400mg、11~15歳 1日量400~600mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。また、空腹時の投与は避けさせることが望ましい。適応3:1日量200mgを頓用する。なお、年齢、症状により適宜増減する。ただし、原則として1日2回までとし、1日最大600mgを限度とする。また、空腹時の投与は避けさせることが望ましい。高齢者は少量から。	慢性関節リウマチ、関節痛及び関節炎、神経痛及び神経炎、背脊痛、頸部症候群、子宮付属器炎、月経困難症、紅斑多形性皮膚炎、環状紅斑、2手術後及び(外傷後の消炎・鎮痛)。急性気管支炎を伴う急性気管支炎を含む。	
	サリチルアミド	サリチルアミドイワキ	中程度の鎮痛作用、抗リウマチ作用		クマリン系抗凝血薬(出血傾向の可能性)、リチウム(リチウム中毒の可能性)、チアジド系利尿薬(チアジド系利尿薬の効果減弱)、他の消炎鎮痛薬			5%以上又は頻度不明(耳鳴、難聴、めまい、血小板機能低下(出血時間延長)、食欲不振、胸焼け、胃痛、悪心、嘔吐)、0.1~5%未満(消化管潰瘍の悪化、長期・大量・過呼吸、貧血、腎障害、肝障害)、過度の体温下降、虚脱、四肢冷却)		消化性潰瘍、重篤な血液障害、重篤な肝障害、重篤な腎障害、本剤過敏症既往歴、アスピリン喘息又は既往歴、原則禁忌:15歳未満の水痘又はインフルエンザの患者	適応禁忌の既往歴またはその重篤でない場合、出血傾向、過敏症既往歴、気管支喘息、高齢者、小児、妊婦又は妊娠の可能性、消耗性疾患、感染症合併者	感染症の顕性化	原因療法でなく対症療法	1日6gまで	長期・大量投与で過呼吸、貧血、腎障害、肝障害	急性疾患:長期服用原則回避、不妊?	1回1~2g、1日3~6g、適宜増減、高齢者は少量から	解熱鎮痛薬の調剤

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 蓄積性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの											使用量に上 限設定なし	
解熱鎮痛成分	エテンザミド 岩城	鎮痛解熱作用。抗ヒアル ロニダーゼ作用、抗滲出性 作用。		クマリン系抗凝血薬(出血傾 向の可能性)、リチウム(リチ ウム中毒の可能性)、チアジ ド系利尿薬(チアジド系利尿 薬の効果減弱)、他の消炎 鎮痛薬			5%以上又は 頻度不明(耳 鳴、難聴、め まい、血小板 機能低下(出 血時間延長)、 食欲不振、胸 焼け、胃痛、 悪心、嘔吐)、 0.1~5%未満 (消化管潰瘍の 悪化、長期・ 大量:過呼吸 、貧血、腎障 害、肝障害)、 過度の体温下 降、虚脱、四肢 冷却	5%以上又は 頻度不明(過 敏症(発疹、 浮腫、喘息発 作等))		消化性潰瘍、重 篤な血液障害、 重篤な肝障害、 重篤な腎障害、 重篤な心臓病 、本剤過敏症 既往歴、アスピ リン喘息又は既 往歴、15歳未満 の水痘又はイン フルエンザの患 者	適応禁忌の既往 歴または重篤で ない場合、出血 傾向、過敏症既 往歴、気管支喘 息、高齢者、小 児、妊婦又は妊 娠の可能性、消 耗性疾患、感染 症合併者	感染症の不 顕性化	原因療法で なく対症療法	調剤薬で 限設定なし	長期・大量投 与で過呼吸、貧 血、腎障害、肝 障害	急性疾患:長 期服用原則回 避、不妊?		解熱鎮痛薬の調剤、高齢 者は少量から	解熱鎮痛薬の 調剤
抗ヒスタミン成分	塩酸ソフェ ニドラミン	ベネ錠 抗ヒスタミン 作用: H1受容体 に対しヒスタ ミンと競合的 に拮抗すること により作用を あらわす。 ヒスタミン遊 離抑制作用:		アルコール・中 枢神経抑制剤 ・MAO阻害剤 (中枢神経抑 制作用が増強) 、抗コリン作 用を有する薬 剤(抗コリン 作用が増強)		頻度不明(口 渇、悪心・嘔 吐、下痢、め まい、倦怠 感、神経過 敏、頭痛、眼 気) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作	頻度不明(過 敏症)		線内障(悪化)、 前立腺肥大等 下部尿路に閉 塞性疾患(悪 化)	授乳中の婦人、 未熟児、新生 児、妊婦又は 妊娠している 可能性のある 婦人、高齢者						塩酸ソフェニド ラミンとして、 通常成人1回 30~50mg(3~ 5錠)を1日2~ 3回経口投与 する。なお、 年齢、症状に より適宜増減 する。	麻疹疹、皮膚 疾患に伴う 痒疹(湿疹、皮 膚炎)、枯草熱 、アレルギー 性鼻炎、血管 運動性鼻炎、 急性鼻炎、春 季カタルに伴 う痒		

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの		過量使用・誤使 用のおそれ
ファル酸クレ マスチン	タベジール タベジールは ベンツヒドリ ルエーテル系 に属する抗ヒ スタミン剤で、 持続的な抗ヒ スタミン作用 を有し、アレ ルギー症状を 除去あるいは 軽減する。抗 ヒスタミン作 用を示す用量 では、鎮静作 用(サル)、抗 コリン作用(モ ルモット回 腸、in vitro)、 抗セロトニン 作用(ラット子 宮、in vitro) 及び抗アドレ ナリン作用 (イヌ)は弱 い。	中樞神経抑制剤・アルコール(中樞神経抑制作用が増強)、抗コリン剤・MAO阻害剤(抗コリン作用が増強)	痙攣・興奮(頻度不明)、肝機能障害・黄疸(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(眠気、AST (GOT)、ALT (GPT)、Al-P、LDH、γ-GTPの上昇、0.1~5%未満(頭重、倦怠感)、0.1~5%未満(悪心、嘔吐、口渇、食欲不振)、0.1%未満(下痢) 自動車の運転等危険を伴う機械の操作	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴、婦人(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化)、狭窄性消化性潰瘍又は幽門十二指腸閉塞(悪化)、授乳中の婦人	てんかん等の痙攣性疾患、又はこれらの既往歴、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、乳児・幼児(痙攣・興奮の副作用に特に注意)、高齢者			過量により、中樞神経抑制、興奮、口渇、瞳孔散大、潮紅、胃腸症状等。			通常成人1日量クレマスチンとして2mgを朝晩2回に分けて経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。高齢者では減量するなど注意が必要	アレルギー性皮膚疾患(蕁麻疹、湿疹、皮膚炎、そう痒症)、アレルギー性鼻炎	
マレイン酸カルビノキサミン	なし														

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
	d-マレイン酸 クロルフェニ ラミン	ホララミン錠 2mg	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱、再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眩暈、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作			本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、線内瘰(線内瘰の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人							d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽。

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用に より重大な問題 が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
鎮咳成分	臭化水素酸 デキストロメ トルファン	メソコ錠15 mg	臭化水素酸 デキストロメ トルファンは、 延髄にある咳 中枢に直接 作用し、咳反 射を抑制する ことにより鎮 咳作用を示 す。		MAO阻害剤 (阻害、反射亢 進、異常高熱 、昏睡等を発症)		呼吸抑制 (0.1%未満)	5%以上又は 頻度不明(眩 暈)、0.1%~ 5%未満(頭 痛、めまい、 悪心、嘔吐、 食欲不振、便 秘、腹痛)、 0.1%未満 (不快、不眠 等、口渇、お くび等)自動 車の運転等 危険を伴う機 械の操作	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)		本剤の成分に対し 過敏症、MAO阻 害剤投与中(臨床症 状として痙攣、反 射亢進、異常高 熱、昏睡等を発 症)	高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人、低 出生体重児、新生 児、乳児、幼児又 は小児						通常、成人には臭化水素 酸デキストロメトルファンと して1回15~30mgを1日1 ~4回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。高齢者では 減量するなど注意が必要	下記疾患に伴 う咳嗽 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、気 管支拡張症、 肺炎、肺結核、 上気道炎(咽 喉頭炎、鼻カ タル) 気管支造影術 及び気管支鏡 検査時の咳嗽
	ヒベンズ酸チ ベピジン	アスベリン 錠	延髄の咳中 枢を抑制し咳 の感受性を 低下させるこ とにより鎮咳 作用を示すと ともに、気管 支腺分泌を 亢進し気道粘 膜絨毛上皮 運動を亢進す ることにより 去痰作用を示 す。				咳嗽・腹痛・ 嘔吐発疹・呼 吸困難等を 伴うアナフィ ラキシー様症 状(頻度不 明)	0.1~5%未満 (眩暈、不 眠、眩暈、食 欲不振、便 秘、口渇、胃 部不快感、膨 満感、軟便、 下痢、悪 心)、頻度不 明(腹痛、興奮)	0.1~5%未満 (過敏症)		本剤の成分に対し 過敏症の既往歴	高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人			過量で眠気、め まい、興奮、譫 妄、異常躁動 、意識障害、 精神錯乱等が あらわれることが ある。			通常成人には、ヒベンズ酸 チベピジンとして1日66.5~ 132.9mg(クエン酸チベピジ ン60~120mg相当量)を3 回に分経口投与する。 小児には、ヒベンズ酸チベ ピジンとして1日1歳未満 5.54~22.1mg(同5~20mg 相当量)、1歳以上3歳未満 11.1~27.7mg(同10~25mg 相当量)、3歳以上6歳未満 16.6~44.3mg(同15~40mg 相当量)を3回に分経口 投与する。 なお、年齢・症状により適 宜増減する。高齢者では 減量するなど注意必要。	下記疾患に伴 う咳嗽及び喀 痰排出困難 感冒、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル)、急 性気管支炎、 慢性気管支 炎、肺炎、肺結 核、気管支拡 張症

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
リン酸シビ ロコデイン	リン酸シビ ロコデイン 100%「タナ ベ」	モルヒネと種 めて類似した 化学構造と薬 理作用を有す るが、作用の 強さはモルヒ ネとコデイン の中間に位 置し、鎮咳作 用量や鎮痛 作用はコデイン より強い。コ デインと同 様、主として 鎮咳の目的 で使用され る。		中枢神経抑制剤・三環系抗 うつ剤・吸入麻酔剤・MAO阻 害剤・β遮断剤・アルコール (呼吸抑制、低血圧及び顕 著な鎮静又は昏睡)、クマリ ン系抗凝血剤(抗凝血作用 が増強)、抗コリン作用性薬 剤(麻痺性イレウスに至る重 篤な便秘又は尿貯留が起こ るおそれ)	薬物依存(頻 度不明)、呼 吸抑制(頻度 不明)、錯乱 (頻度不明)、 無気肺・気管 支痙攣・喉頭 浮腫(頻度不 明)、 炎症性腸疾 患の患者に 投与した場 合、麻酔性イ レウス・中毒 性巨大結腸 (頻度不明)	頻度不明(不 整脈、血圧 変動、顔面潮 紅、眩暈、眩 暈、視覚障害 、発汗、悪 心、嘔吐、便 秘、排尿障 害)、自動車 の運転等危 険を伴う機械 の操作	頻度不明(過 敏症)			重篤な呼吸抑制 (増強)、気管支喘 息発作中(気道分 泌を妨げる)、重 篤な肝障害(昏睡に 陥ることがある)、 慢性肺疾患に続 発する心不全(呼 吸抑制や循環不 全を増強)、痙攣 状態(腎臓の刺激 効果)、急性アル コール中毒(呼吸 抑制を増強)、ア ンアルカロイドに 対し過敏症、出 血性大腸炎(症状 の悪化、治療期 間の延長をきた すおそれ)、細菌 性下痢(治療期 間の延長をきた すおそれ)	心機能障害、呼吸 機能障害、肝・腎機 能障害、脳に器質 的障害、ショック状 態、代謝性アシド シス、甲状腺機能 低下症、副腎皮質 機能低下症、薬物 依存の既往歴、高 齢者、新生児、乳 児、衰弱者、前立 腺肥大による排尿 障害、尿道狭窄、 尿管手術後、器 質的幽門狭窄、麻 痺性イレウス、最近 消化管手術、痙攣 の既往歴、胆嚢障 害及び胆石、重篤 な炎症性腸疾患、 妊婦又は妊娠し ている可能性のある 婦人、授乳中の婦 人、分娩前、分娩 時	細菌性下痢		過量で呼吸抑 制、意識不明、 痙攣、錯乱、血 圧低下、重篤な 脱力感、重篤な めまい、嗜眠、 心拍数の減少、 神経過敏、不 安、痙攣、皮膚 冷感等を起こす ことがある。	運用により薬 物依存。運用 中における投 与量の急激な 減少を中止し 投与の中止 で過薬症候。		通常成人には、1回10mg、 1日30mgを経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に、生理 機能の低下している高齢 者・新生児・乳児では、呼 吸抑制の感受性が高いた め、低用量から投与を 開始するなど患者の状態 を観察しながら、慎重に 投与すること。	各種呼吸器疾 患における鎮 咳・鎮静 疼痛時にお ける鎮痛 激しい下痢 症状の改善
去 たん 成分	d1-塩酸メ チルエフェ ドリン	アドレナリン 作用性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	カテコールア ミン製剤(不 整脈、場合によ っては心停止を 起こす)	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンチン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下)	β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下	頻度不明(熱 感)、0.1~ 5%未満(心 悸亢進、顔面 蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眩暈、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇)	頻度不明(過 敏症)、			カテコールアミン 製剤を投与中(不 整脈、場合によ っては心停止を 起こすおそれ)	甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血 清カリウム低下)		過度に使用を 続けた場合、不 整脈、場合によ っては心停止を 起こすおそれがある		d1-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25~ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル) 蕁麻疹、湿疹		
	グアイフェ ネシン	フストジル未 フストジル 錠(共通の 添付文書) なお、フス トジル錠は後 発医薬品	鎮咳作用、気 管分泌促進 作用。			頻度不明(食 欲不振、悪 心)、0.1~ 5%未満(胃 部不快感)					高齢者				グアイフェネシンとして、通 常成人1日300~900mgを 分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽及び咯 痰咳出困難 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル)		

かぜ薬(内用)

製品群No. 1

ワークシートNo. 1

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
その他の成分	併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
グアヤコール スホン酸カリ ウム	なし																		
無水カフェ イン	無水カフェ イン「エビス」	大脳皮質を 中心に中枢 神経系を興奮、 脳幹網様 体の賦活系 の刺激により 知覚が鋭敏と なり精神機能を 亢進する。 また、脳細動 脈に直接作用 して脳血管を 収縮させ、 その抵抗性を 増加して脳血 流量を減少する。			キサンチン系薬剤・中枢神経 興奮薬(過度の中枢神経刺 激作用)、MAO阻害剤(頻 脈、血圧上昇等)、シメチン (過度の中枢神経刺激作用)						胃潰瘍又はその既往 歴、心疾患、緑 内障、高齢者、妊 娠又は妊娠している 可能性のある婦 人及び授乳婦				[大量・過量投 与]消化器症状 (悪心、嘔吐等)、 循環器症状(不 整脈、血圧上昇 等)、精神神経症 状(振せん、痙 攣、昏睡、虚脱、 眩暈、不眠、不安)、 呼吸器症状 (呼吸促進、呼吸 麻痺等)、瞳孔散 大などの増悪を 起こすことがあ る。	妊娠又は妊 娠している可 能性のある 婦人及び授 乳婦には長 期連用を避 けること。		通常成人1回0.1~0.3gを1 日2~3回経口投与する。 なお、年齢、体重により適 宜増減する。一般的に高 齢者では生理機能が低下 しているため減量するなど 注意すること。	ねむけ、倦怠 感、血管拡張 性及び脳圧亢 進性頭痛(片頭 痛、高血圧性 頭痛、カフェ イン禁断性頭痛 など)